『日本語学論集』第１０号　２０１４年３月

# 古代語「ものゆゑ」と「ものから」の意味変化について

馬　紹華

## １．はじめに

「ものゆゑ」と「ものから」［注１］は古代語の接続助詞として、発生時期、構成要素及び意味機能が類似しているため、古語辞書類や一般文法書などでは一括して逆接と順接の確定条件を表すものだと扱われている。

この二語の相違に関する詳細な研究は、管見の限り小谷（1973）しか見られない。小谷氏は、「ものゆゑ」は順接でもなく逆接でもなく主体の情意をより明確にすることが主たる目的とした語であり、「ものから」は前件、後件を理性的に結びつける逆接助詞だと述べている。「ものゆゑ」の意味機能に関する氏の記述は、従来の辞書類などの解説と異なる部分があり、更に検討する余地があると思われる。また、氏の考察は上代、中古の歌の用例が中心となり、散文における「ものゆゑ」と「ものから」の意味用法には触れていない。

そこで、本稿は改めて古代語「ものゆゑ」と「ものから」の意味用法を再考察する。議論を進める具体的な方法としては、まず、上代から近世にかけての散文及び韻文を分析対象とすることで二語の意味用法を考察し、それぞれの意味変遷の過程を究明する。そのうえで、この二語は果たして同じ性質のものであるか否かを明らかにする。

## ２．上代から近世にかけて「ものゆゑ」の意味変化

### ２．１　上代語「ものゆゑ」の逆接用法

上代語資料における「ものゆゑ」と「ものから」の用例は記紀などの資料に見られず、万葉集にのみ現れている。「ものゆゑ」の用例は下記の五例となる。

(1) a　朝東風にゐで越す波の外目にも逢はぬものゆゑ（鬼故）滝もとどろに（巻十一・2717）

b　波の間ゆ雲居に見ゆる粟島の逢はぬものゆゑ（物故）我に寄そる児ら（巻十二・3167）

c　我が故に思ひな痩せそ秋風の吹かむその月逢はむものゆゑ（母能由恵）（巻十五・3586）

d　年のはに来鳴くものゆゑ（毛能由恵）ほととぎす聞けばしのはく逢はぬ日を多み（巻十九・4168）

e　天雲の行き帰りなむものゆゑに（毛能由恵尓）思ひそ我がする別れ悲しみ（巻十九・4242）

上記の「ものゆゑ」の用法について、万葉集の諸注釈書では殆ど逆接関係を表わすと解釈している。その逆接的な意味を「もの」に求めるべきか否か、従来の研究では意見が分かれている。石垣（1955）は、「ゆゑ」には何の逆接的意味を発見しえず、「もの」という語自体が逆接的意味を有すると述べている（p.103）。これに対して、此島（1981）は、「もの」自体は連体修飾語を受けてそれを体言化するだけで、一方で「ゆゑ」という語自体に逆接の意があるとも認めず、むしろ具体的な文脈によって逆接の意が生ずるとしている。

このように、両者は「ものゆゑ」の逆接的意味の由来に関する主張は異なるものの、その（逆接的意味の）根拠を「ゆゑ」に求めないことは共通している。しかし、本研究では上代語「ものゆゑ」の意味用法が「ゆゑ」からの影響が大きいと考える立場をとる。その理由として、a、b の歌の構造や意味が次の f の「ゆゑ」の歌と非常に近似している点が挙げられる。

f　紀伊の海の名高の浦に寄する波音高きかも逢はぬ児故に（故尓）（巻十一・2730）

構造：a、b「修飾語句＋否定ぬ＋もの＋ゆゑ」

　　f「修飾語句＋否定ぬ＋体言＋ゆゑ」

意味：a、b、fは共に「逢っていないのに、噂が高い」という内容である。

万葉集の「ゆゑ」の用法を見ると、「噂が高いことよ、あの娘と逢っていないのに」のように逆接関係を示すこの種の例が「ゆゑ」の過半数を占めていることが分かる[注2]。さらに、c、d、e の歌には上記の特徴が検出されず、「ものゆゑ」の成立には「もの」と「ゆゑ」が分離できる状態から一語化していく段階性が観察できる[注3]。

次に、「ものゆゑ」の逆接関係を示す用法はどのように理解できるかを以下で検討する。一般的に逆接とは、前件から順当に予測された結果が後件で実現できなかったという関係である。「ものゆゑ」の場合は前件からの予測が実現できなかったというより、後件では予測されていない事態が発生したという意外性に重点がある。

たとえば、a においては、前句の「逢はぬ」ことから「噂を立つことはない」という期待が推論できる。しかし、現実は「滝もとどろに」が示すように、噂は波の音の如く

実に高いことであり、詠み手の予想外の事態となる。即ち、「ものゆゑ」の逆接関係は、後句の出来事が前句から順当に推論される期待と相反することによって生じるものである。この構造を以下のように表示できる。

(1)′ a 「逢わぬ」⇒「噂を立つことはない」〈期待〉

⇕

「逢わぬ」⇒「滝もとどろに（噂が高い）」〈現実〉

他の「ものゆゑ」の歌も上記の構造で逆接関係を説明することができる。c は「秋風の吹くその月に帰って来て逢うのだから」（岩波古典大系）のように順接に解する注釈があるが、相手の嘆き悲しむ様子を見て、「……帰って来て逢うであろうのに（なぜそんなに悲しむのか）、私のために思いやせないでおくれ」のように、逆接と解する方が自然であろう。

## 2．2　中古語「ものゆゑ」の意味用法

### 2．2．1　逆接用法から順接用法への展開

中古に入ると、「ものゆゑ」は韻文だけでなく、散文にも現れるようになった。古今和歌集などの韻文における「ものゆゑ」の用法は、上代と同じく逆接関係を示すものである。

(2) a　待つ人も来ぬものゆゑに鶯の鳴きつる花を折りてけるかな（古今・100）

b　いたづらに行きては来ぬるものゆゑに見まくほしさにいざなはれつつ（古今・620）

散文における「ものゆゑ」の用法について、先行研究では逆接を表す（此島 1981・小杉 1994・竹部 2008）、逆接・順接両方を表す（啓斉 1993）、順接を表す（吉野 1992）[注４]の三つに見解が分かれている。なお、散文に現れる「ものゆゑ」の用法を更に検討する余地があると見て、以下では散文の用例を中心に考察していく。特に逆接を主張する説のなかでも、竹部（2008）を代表に検討してみる。氏は、図１の構造を用いて「ものゆゑ」の逆接用法を説明している。

(3) a　かの人のことを、いとあはれと思ひてのたまひしに、いとほしうてうち出でつべかりしかど、それ（浮舟）にもあらざらんものゆゑと（薫に）つゝましうてなん。（源氏物語・手習 364）

b　（明石上）人数にも思されざらんものゆゑ、我はいみじきもの思ひをや添へん。（源氏物語・明石 80）

c　父の入道ぞ、「きこゆべき事なむ。あからさまに対面もがな」と言ひけれど、（良清）「うけひかざらむものゆゑ、行きかゝりて、空しうかへらむ後ろ手も、をこなるべし」と、くんじいたうて、ゆかず。　（源氏物語・須磨 46）

図１　竹部（2008）による「ものゆゑ」の構図（網掛けは補足した内容である）

P　　Q［＝推論に基づく予期］　　Q ではない［＝反予期］

【それにもあらざらん―〔薫に話さない方がよい〕】―【薫に話す】―つつましくてなん

（3）a は、入水した浮舟が生きていることは事実ではないかもしれないから、薫に話すことを遠慮したという話である。竹部氏は、前件では「それにもあらざらん」ことから、「薫に話さないほうがよい」という予期があり、後件では「薫に話す」という予期に反した事態が起こり、逆接になると述べている。

しかし、「薫に話す」という補足の内容がなくても意味は十分通じる。即ち、前件では「浮舟が生きていることは事実ではない」可能性があるから、後件では「薫に話すことを遠慮した」のである。つまり、前件は理由で後件はその理由で行った行為であるため、「ものゆゑ」の用法は順接だと考えられる。

（3）b は明石上の心内であり、「（自分は）源氏に思い人の数に入れてもらえないだろうから、大変な思い煩いが加わるのだ」といった内容で解釈できる。（3）c は、姫との婚姻を望んでいる良清が、姫の父親である明石入道から会いたいと言われたが、「どうせ婚姻を認めてもらえないだろうから、会いに行かない」という内容で解釈することが可能である。

以上のように、竹部氏の論文で挙げた（3）a、b、c においては、「ものゆゑ」はいずれも順接用法として解釈できることが明らかになった。これらの用例が仮に逆接・順接両方の意味で理解できるとしても、（4）a、b、c における「ものゆゑ」はむしろ順接でしか理解できないものとなる。

（4）a　親君と申（す）とも、かくつきなきことを仰（せ）給ふことゝ、事ゆかぬ物ゆゑ（簡単に運ばぬゆえに）、大納言をそしりあひたり。　（竹取物語 46）

b　「待てしばし。見知らば当たらぬものゆゑ（鳥が感づいたら矢は当たらないので）、鳥立ちなば興さめなむ。なほ労経し兵衛尉まづ試みてむや」　（うつほ物語・内侍のかみ 186）

c　「遂ニ知シ食サム物故ニ（いつかはお分かりになるから）、不隠レ申シ不候ジ」ト思ヒ給テ、此ク参テ候フ也。　（今昔物語集・巻二十九 144）

筆者の調査では、平安時代の和文物語における「ものゆゑ」の用例は決して多いものではなく、十数例にとどまる。以下の表１で平安時代における「ものゆゑ」の用例分布を掲示する。

表１　中古和文における「ものゆゑ」の用例分布

| 竹取物語 | 伊勢物語 | 土佐日記 | 平中物語 | 落窪物語 | 蜻蛉日記 | 大和物語 | 枕草子 | 和泉式部日記 | 源氏物語 | 紫式部日記 | 栄花物語 | 夜の寝覚 | 浜松中納言物語 | 堤中納言物語 | うつほ物語 | 更級日記 | 狭衣物語 | 讃岐典侍日記 | 大鏡 | 今昔物語集 | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | — | — | — | — | — | — | — | — | 4 | — | — | 1 | — | — | 2 | — | 2 | — | — | 5 | 15 |

此島（1981）では、「従来「ものから」の順接の例として挙げられたものを見ると、どうしてもそう見なければならないという例は、平安末以後中世に入ってもほとんど無いように思われる」（p.12）と述べている。しかし、本稿の考察によれば、むしろ上記の十五例においては「ものゆゑ」を逆接に解さなければならないものはないように思われる。従って、平安時代「ものゆゑ」の用法をもっと積極的に順接だと主張すべきではなかろうか。

このように、上代から中古にかけて「ものゆゑ」の用法が逆接から順接に変化したのは、下接の「ゆゑ」が大きく影響しているためと推定できる。上代語「ゆゑ」が逆接に用いられたことは橘（1928）では既に指摘されており、中古における「ゆゑ」が順接に用いられることは周知の如きである。「ものゆゑ」はその影響を受けて順接用法へ変ったと考えられる。

### ２．２．２　順接用法の特殊性

前節で中古語「ものゆゑ」の用法は順接だと確認したが、しかし、その順接用法は一般に前件から後件を順当に導く関係ではなく、ここで示される後件は前件の望ましくない状況のもとで下された判断である。本稿は、このような因果関係を消極的な順接用法と名付ける。紙面を費やすことになるが、(3) a～cを再度に掲示して考察を行う。

(5) a　かの人のことを、いとあはれと思ひてのたまひしに、いとほしうてうち出でつべかりしかど、それ（浮舟）にもあらざらんものゆゑと（薫に）つゝましうてなん。　（源氏物語・手習 364）

b（明石上）人数にも思されざらんものゆゑ、我はいみじきもの思ひをや添へん。
（源氏物語・明石 80）

c 父の入道ぞ、「きこゆべき事なむ。あからさまに対面もがな」と言ひけれど、（良清）「うけひかざらむものゆゑ、行きかゝりて、空しうかへらむ後ろ手も、をこなるべし」と、くんじいたうて、ゆかず。（源氏物語・須磨 46）

（5）a は、前件では「浮舟が生きている」ことが望ましい事態であるが、それは確かであるか否か分からないから、後件では「薫に話すことを遠慮した」のである。（5）b は、前件では「源氏に思い人の数に入れられる」ことを望んでいるが、しかしそれが実現できないから、後件で源氏への思いを諦めたのである。（5）c は、吉清は姫との婚姻を望んでいるが、入道はそれを認めてくれないから、後件では会いに行かないことを決めたのである。以上のように、「ものゆゑ」は前件の望んでいることが実現できないから、後件のような事態になった、もしくはそのような判断を下したという消極的な因果関係を表す。

さらに、以下のように「ものゆゑ」は「かひなき」を下接して、前件の望んでいる事態は何のかいもないことで、後件は仕方がなくそのような事態となった場合もある。

（6）a 悔しきことやうやうまさりゆけど、今はかひなきものゆゑ、常にかうのみ思はば、あるまじき心もこそ出でくれ、誰がためにもあぢきなくをこがましからむと思ひ離る。（源氏物語・早蕨 351）

b さりとて、受け取り、あはれをかけても、なにのかひあるべうもあらぬ」ものゆゑ、ものの聞こえいみじうわづらはしかるべければ、荒からぬものから、うけひくことなし。（夜の寝覚 77）

c 我は我と、かかる心の付き初めて、思ひわび、ほのめかしたまふもかひなきものゆゑ、あはれに思ひかはしたまへるに、思はずなる心ありけると、思し疎まれこそせめ、（狭衣物語 19）

（6）a は、宇治を訪れた薫は中の君を匂宮に譲ったことを後悔し、しかしそのことは今となってはどうにも仕方がないから、宮のことを思い諦めたということであり、（5）b は、狭衣の君は源氏の宮に恋心を寄せることを望んでいるが、しかしそのことは何のかいもないから、宮への思いはあってはならないということであり、（5）c は、中納言は対の君に手紙を寄せたが、対の君が姉君の夫では何の効もあるはずがないから、中納言の心を受け入れなかったということである。

以上、中古散文における「ものゆゑ」の意味機能は順接用法であるものの、一般的な因果関係を表すものではないことが分かった。前件では望ましい事態が実現できないか

ら、あるいはその事態は今となって何の効もないことであるから、後件のような事態となった、もしくはそのような判断を下したという消極的な因果関係を表すことが特徴的である。

## 2．3　中世の順接用法における副詞との共起

中世に入ると、「ものゆゑ」は依然として前件では望ましい事態が実現できないから、後件では仕方が無く判断を下したという消極的な順接用法として用いられている。ただし、文脈の特徴として、「とても」、「つひに」などの副詞と共起することが顕著になった。

(7) a　日本國に、平家の庄園ならぬ所やある。とてものがれざらむ物ゆへに、年来住みなれたる所を人にみせむも恥がましかるべし。　（平家物語・巻 259）

b　とてものがれぬ物故に、敵に見苦しき有様見えて、後にうき名を流さんも心うし。早々我を失ひて、心安く自害せよ。　（太平記・巻二十一 71）

c　とても隠れあるまじきもの故に、狩庭の雉の草隠れしたる有様、敵にさがし出されて、幼き御尸に一家の御名を失はれん事口惜しく候ふ。　（太平記・巻十 526）

d　とてもかくても遁れぬもの故に、弱りて後押へて首を取られんも詮なし。今は腹切らばやと思ひて、太刀を打振りて縁につゝと上り、西向に立ち、合掌して申（し）けるは、　（義経記・巻六 250）

e　大衆此処に押し寄せて「九郎判官殿のこれに御渡り候ふか。終に（つひ）逃れさせ給ふまじき物故に、出でさせ給へや」と言ひける声に驚きて兜を直し火打ち消ちて、　（義経記・巻五 271）

このように、「ものゆゑ」の構文に「とても」、「つひに」が共起する用例は、『太平記』三例の中に二例あり、『義経記』九例の中に五例が観察される。古語辞典『時代別国語大辞典　室町時代編』では、「とても」の意味について、「打消の言い方と呼応して、あれこれしたところで、結局のところはその実現の可能性が皆無である意を表す」（p.276）と記載している。

上記の「とても」の用法は現代語副詞の「どうせ」の意味用法と類似している。即ち、ある状態や結果は初めから大前提が定められていて、いずれにせよ結末はその前提通りになるという発想である。(7) a ～ e の用例でいうと、殆どの場合は前件では「逃げられない」状況に陥ったから、後件では敵に見苦しき有様で捕まえられるより、自害するほうがよいという判断を下した内容である。

即ち、前件では逃げられることが望ましい事態であるが、それが実現できないから、後件では自害などの事態を述べる。このように、中世の「ものゆゑ」は、中古のように消極的な因果関係のニュアンスを表わすが、そこに「とても」と「つひに」などの副詞が共起している。これは「ものゆゑ」の消極的な順接関係を表わすニュアンスが次第に衰えたため、それを維持するために副詞が用いられたからであると考えられる。中世の和文資料から採集した「ものゆゑ」の用例を次の表２にまとめる。

表２　中世和文資料における「ものゆゑ」の用例分布

| 梁塵秘抄 | 山家集 | 保元物語 | 平治物語 | 平家物語 | 松浦宮物語 | とりかへばや物語 | 方丈記 | 愚管抄 | 宇治拾遺物語 | 十訓抄 | 古今著聞集 | 沙石集 | 吾妻鏡 | とはずがたり | 徒然草 | 曽我物語 | 太平記 | 義経記 | 信生法師日記 | 橋立の本地 | 栂尾明恵上人遺訓 | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 2 | — | — | 3 | 2 | 2 | — | — | — | 1 | 1 | 1 | — | 1 | — | 3 | 3 | 9 | 1 | 1 | 1 | 32 |

## ２．４　近世において消極的な順接用法から一般の順接用法へ

中古、中世の「ものゆゑ」は消極的な順接用法を表し、殊に中世ではその消極的なニュアンスが弱まったことを前節で述べた。この結果、近世に入ると、「ものゆゑ」が表した消極的なニュアンスがさらに弱まり、一般的な順接用法として用いられるようになった。

(8) a　これは揃いに着せるつもり、とかく夜栄へる物ばかりの案じ、今夜の四ツまでにできあがるやうに頼む。大急ぎのものゆへ、代金は現金に払つてやると、金二百両、なんの惜しげもなく渡しける。　（黄表紙・江戸春一夜千両 118）

b　ト女ども四五人、くち／〃＼にやかましくしゃべりたちて、弥次郎を中にとりまきせめたつる。すべて、此女あきん人は、みないたつてきのつよきものゆへ、なか／＼がてんせず。　（東海道中膝栗毛 391）

c　詞馬の皆具には泥のかゝらぬ物故に、障泥といふ字は泥を障つと書く、泥のかゝらぬ物ならば何しに障つるといふ字の入るべきぞ。

（近松門左衛門集・女殺油地獄 400）

d　しかしわれ／＼とても浪人の身の上、これこそ塩谷判官殿の御石塔と、末の世までも人の口の端にかゝるものゆゑ、御用金を集むる、その御使、先君の御恩を思ふ人をえり出すため、わざと大事を明かされず。

（浄瑠璃集・仮名手本忠臣蔵 62）

(8) a は大急ぎであるから、代金は現金二百両を惜しげなく渡すということであり、(8) b はみんな気が強いから、なかなか意見が合点できないということであり、(8) c は馬の皆具は泥がかからないものであるから、障泥という字は泥をへだつと書くということである。これらの用例から分かるように、「ものゆゑ」の前件には望んでいる事態が実現できないため、後件のような事態となったというニュアンスは全く感じ取られず、むしろ前件が理由を表して後件はその理由で行った行為であるという意味合いで解釈するのが自然である。以上、近世の作品における「ものゆゑ」の用例を次の表３にまとめる。

表３　近世口語文と文語文における「ものゆゑ」の用例数

| 口語文作品 | 竹齋 | きのふはけふの物語 | 醒睡笑 | 博多小女郎波枕 | 曾根崎心中 | 傾城禁短気 | 山崎与次兵衛寿の門松 | 女殺油地獄 | 役者論語 | 手前勝手御存商売物 | 名歌徳三舛玉垣 | 江戸春一夜千両 | 傾城買四十八手 | 東海道中膝栗毛 | 浮世風呂 | 花暦八笑人 | 春色梅児誉美 | 小計 | 文語文作品 | 松の葉 | 松尾芭蕉集 | 仮名手本忠臣蔵 | 排蘆小船 | 雨月物語 | 春雨物語 | しりうごと | 英草紙 | ひとりね | 椿説弓張月 | 小計 | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 1 | − | − | 1 | 1 | − | 1 | 1 | 2 | 1 | 1 | 1 | − | 2 | 2 | − | − | 14 | | 1 | 1 | 1 | 5 | − | − | 2 | 2 | 5 | − | 17 | 31 |

ここまで、上代から近世にかけて「ものゆゑ」の意味変化の過程を考察してきた。その流れを図で示すと次のようになる。

図２．上代から近世にかけて「ものゆゑ」の意味変化の流れ

上代：後件は前件から順当に予測される結果に反する　逆接用法

⇩

中古：前件では望ましい事態が実現できないため、
後件は仕方がなくそのような判断を下した。

中世：前件では副詞「とても」と共起するようになり、
「ものゆゑ」が表した消極的な意味合いが弱まる。

消極的な順接用法

⇩

近世：前件は理由で後件はその理由で順当に導かれる事態である　一般的順接用法

## 3．上代から近世にかけて「ものから」の意味変化

### 3．1　上代語「ものから」の矛盾関係

上代語「ものから」の用例数は「ものゆゑ」より一例多く、万葉集から六例が検出された。

(9) a　玉葛絶えぬものから（物可良）さ寝らくは年の渡りにただ一夜のみ（巻十・2078）

b　見渡せば近きものから（物可良）岩隠りかがよふ玉を取らずは止まじ（巻六・951）

c　道遠み来じとは知れるものからに（物可良尓）然そ待つらむ君が目を欲り（巻四・766）

d　相見ては面隠さるるものからに（物柄尓）継ぎて見まくの欲しき君かも（巻十一・2554）

e　一嶺ろに言はるものから（毛能可良）青嶺ろにいさよふ雲の寄そり妻はも（巻十四・3512）

f　……大君の敷きます国は都をもここも同じと心には思ふものから（毛能可良）語り放け見放くる人目乏しみと思ひし繁し　……（巻十九・4154）

万葉集に現れる「ものゆゑ」の逆接用法について、後句は前句から順当に導かれる結果とは反するため、逆接に捉えるのが自然であることを上述した。「ものから」の場合は、結論を先取りして述べると、前句と後句は認識と現実との矛盾関係となり、逆接の意味が生じたのである。たとえば、(9) a は長く切れない縁だと思っていたが、しかし、現実では一年で寝るのはただ一夜のみであり、縁が短いことを表している。その他の矛盾関係は下記のように示すことができる。

(9)′ a　「玉葛　絶えぬ」　⇔　「さ寝らくは　年の渡りに　ただ一夜のみ」
（長く切れない縁だと思うが、現実では縁が短いこと）

b　「見渡せば　近き」　⇔　「岩隠り　かがよふ玉を　取らずは止まじ」
（真珠は近くにあるように思うが、現実は岩に隠れている）［注５］

c　「来じとは知れる」　⇔　「然そ待つらむ」
（来ないと分かるが、現実では待ち続ける）

d　「相見ては　面隠さるる」　⇔　「継ぎて見まくの」
（恥ずかしくて顔を隠したくなるが、現実では見続けている）

e　「一嶺ろに　言はる」　⇔　「青嶺ろに　いさよふ雲の　寄そり妻はも」
（他人から夫婦のように言われるが、実際は人から言い寄せられる嘘の妻である）［注６］

f　「心には思ふ」　⇔　「語り放け　見放くる人目乏しみと　思ひし繁し」

（都でもここでも同じだと思ったが、現実では語り合う人が少なく、不安である）

このように、「ものから」の前後は推論過程によって結びつけられた関係ではなく、認識と現実が表した内容そのものが矛盾する関係となる。(9) c は「ものゆゑ」のような逆接関係とも考えられるが、「来ないと分かる」と「待ち続ける」の二項は明らかに対立する内容であり、認識と現実の矛盾関係と考えても差し支えないであろう。

### 3．2　中古語「ものから」の意味用法

上代語「ものから」は、「ものゆゑ」と用例数の差が見られないが、中古語になると「ものから」の勢力が急速に拡大する。中古では散文に多数に用いられ、源氏物語だけで約一四〇例が見つかり、「ものから」の最盛期と言われている。と同時に、韻文に現れる「ものから」の意味用法は上代万葉集と同様に矛盾関係を表すように見える。

(10) a　いつはりと思ふものから今さらに誰がまことをか我は頼まむ（古今・713）
「あの人の言葉が偽りだと思うが⇔誰の言葉を真実と私は頼みにできるか」
b　暮れぬとは思ふものから藤の花咲ける宿には春ぞ久しき（新古今・165）
「春は暮れてしまうとは思う⇔この家には春がいつまでも続いている」

一方で、散文における「ものから」の意味用法については、先行研究では一つのものの持つ表裏二面をつないでいる「対比表現」だと記述している（山内 1981 p.80）。しかし、筆者の調査では、「ものから」の前後には対立するものだけでなく、矛盾するものも並立するものも観察されている。詳細を以下のように「矛盾関係」「対立関係」「並立関係」の三つに分類して考察を進める。

#### 3．2．1　矛盾関係

このタイプの用例は、万葉集の「ものから」の意味特徴を受け継ぐものだと見られる。つまり、前件と後件は認識と現実の矛盾した事実関係となり、さらに細かく分類すると、思考と行動、言葉と行動、言葉と内心が表した内容が矛盾関係となる。

(11) a　されば、思ひはかれず思ふものから。こと女ども、この男の親族の男なる、花摘みにぞ、行きける。（平中物語 94）
b　「何の子持ちか冷たきにかかるわざはせさせ給ふ」と聞こえ給ふものから、よき薄様ども、筆、墨など持てまゐり給ひつつ、御硯をさへ持てまゐりた給へれば、とらせ給へるを、……（紫式部日記 472）

c　夢のやうなりける前の世のちぎりのほどぞかし」とばかり、おぼしけちて止み給ぬ。と、さすがにいとあるべかしうなつかしき物から、思ひよらず言ひ放ち給ひ、……　（浜松中納言物語 205）

（11）a は男が女と特別な関係を持ちたいが、それを他人に知られることを恐れて、何でも同行者大勢で行動するということであり、（11）b は、殿は中宮が物語の冊子を作るのを見て、この冷たい時節にこんなことをなさるのかと申し上げる一方で、薄様の紙とか筆、墨など何度か持っておいでになるということであり、（11）c は、女王の君は中納言に逢わないと口に言うものの、やはり思いは消しがたいということである。

上記の用例において、前件の認識と後件の行動が表した内容が矛盾となることは明らかである。本来、矛盾となる事柄は一文の中で両立不可能であるが、しかし、前件と後件は思考と行動、言葉と行動、感情と行動のように異なる観点から事柄を叙述するので、矛盾となる関係でも一文に両立できたのである。

### 3．2．2　対立関係

このタイプの用例は、上記の矛盾関係のタイプと違って、「ものから」の前件と後件には一つの事柄をめぐって二つの方面からの叙述が置かれたものである。

（12）a　誰も誰もうれしきものからゆゆしう思して、さまざまの御つつしみせさせたてまつりたまふ。　（源氏物語・葵 20）

b　所のさま絵に描きたらむやうなるに、竹編める垣しわたして、石の階、松の柱、おろそかなるものからめづらかにをかし。　（源氏物語・須磨 213）

c　げに、御心地ざまも、おどろおどろしからぬものから、月日を経てさはやぐけぢめもなくのみ沈み過ぐしたまへば……　（夜の寝覚 440）

（12）a は葵の上の妊娠に対して周囲のものがうれしいと感じる一方で、不安を抱えるということであり、（12）b は源氏の須磨の寓居は粗末である一方で、風趣があるということである。（12）c は寝覚の上の病状はそれほど重篤ではないが、月日が立ってもいっこうに快方に向かうめどが立たないということである。

中古における「ものから」の使用法では、この対立関係になるタイプの用例が最も多くて、「ものから」の前後は他にも容貌、感情、言葉などの事柄をめぐる二面の叙述などが多く見られる。対立関係と矛盾関係との顕著な違いについて述べると、対立関係の場合は前件と後件はそもそも両立不可能な事柄ではないことが挙げられる。たとえば、感情や風景などの一つの事柄に対して、様々な心情や感想などが生じることが想定でき

る。従って、このタイプの「ものから」の前後には、両立不可能な完全に矛盾する出来事はなく、一つの物事が持つ一見対立するように思われる側面が叙述されるものである。

### 3．2．3　並立関係

このタイプの用例は、前節と同様に一つの事柄をめぐる二つの側面を描くものであるが、ただし二つの側面が対立するのではなく、並立する場合である。

(13) a　あざやかに気高きものから、なつかしうなまめいたり。
（源氏物語・柏木 329）

b　又このみかど、堯の子堯ならむやうに、おほかたの御心ばへのをゝしうけ高く、かしこうおはしますものから、御才も限なし。（栄花物語・月の宴 28）

c　あさましう恥しう思されて、なを、あてに苦しきものから、たゞ御衣にまとはれて思ししほれたるさま、なのめならずらうたげなり。（狭衣物語 130）

(13) の用例は、いずれも優れる人柄や容貌に関する描写である。(13) a は夕霧が気高いと同時に、優雅でいらっしゃるということであり、(13) b は帝が気品高い一方で、学問も堪能であるということであり、(13) c は女二宮が上品で労しい様子と共に、可愛いらしいということである。

並立関係は、対立関係と同じく一つの事柄に関する二面の叙述である点は共通しているが、類義的な表現を重ねるところで異なっている。さらに、矛盾関係を含めた上記の三つのタイプはそれぞれ独立するものではない。矛盾関係と対立関係は共に前件と後件が対比関係になるという点で共通し、前者は二つの事柄をめぐる叙述で後者は一つの事柄をめぐる叙述である点が異なる。一方で、対立関係と並立関係は共に一つの事柄が持つ二つの側面が描かれるという点で共通するが、前者は対立関係になり後者は対立関係にならない点で異なる。

以上、本稿の調査を通して、「ものから」の前後関係は矛盾、対立、並立の三つが存在することを判明し、「ものから」の本質的な意味用法は前件、後件の対等的なものを繋ぐことだと考えられよう。中古和文における「ものから」の用例状況は次の表４の通りになる。

表４　中古「ものから」の意味用法の分類

| 中古 | 竹取物語 | 伊勢物語 | 土佐日記 | 平中物語 | 落窪物語 | 蜻蛉日記 | 大和物語 | 枕草子 | 和泉式部日記 | 源氏物語 | 紫式部日記 | 栄花物語 | 夜の寝覚 | 浜松中納言物語 | 堤中納言物語 | うつほ物語 | 更級日記 | 狭衣物語 | 讃岐典侍日記 | 大鏡 | 今昔物語集 | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 矛盾 | — | — | — | 3 | — | 2 | — | — | — | 7 | 1 | 1 | 2 | 3 | — | — | — | 2 | — | — | — | 21 |
| 対立 | — | 1 | — | 3 | 3 | 1 | — | 1 | 1 | 111 | 4 | 18 | 17 | 5 | 1 | 19 | — | 27 | — | 1 | 8 | 221 |
| 並立 | — | — | — | — | 1 | 2 | — | — | — | 12 | 2 | 8 | 4 | 5 | — | 2 | — | 8 | — | 2 | — | 46 |

## ３．３　中世における「ものから」の意味変化

中古は「ものから」の全盛期と言える状況であったが、中世になると「ものから」の勢力は急速に衰える。意味用法の変化について、元々用例数が少なかった矛盾関係は殆どなくなり、並立関係も以前と比べて用例数も減少する。対立関係は従来と変わらず用例数が最も多く、また、新たに逆接関係のものが現れる。

(14) a　関白殿、『乱りがはしのことや』とうち笑ひたまふものから、涙のこぼれたるなど、いとあはれなり。　（無名草子 249）

b　「……」とつれなければ、恨みは尽きぬものから、言ひ知らぬ思ひのみまさりて、さらに許さぬおのが衣々を、かたみに思ひわびて、（松浦宮物語 106）

c　十二月一日ごろなりしやらむ、夜に入りて、雨とも雪ともなくうち散りて、村雲騒がしく、ひとへに曇りはてぬものから、むらむら星うち消えしたり。（建礼門院右京大夫集　127）

(14) は従来の対立関係になるものである。(14) a は、関白は笑う一方で涙がこぼれるということであり、(14) b は、男と別れた女は恨めしさは消えないものの、言いようもない思慕の気持ちばかりが募るということであり、(14) c はすっかり曇り切ってしまわないものの、星は殆ど見えなくなったということである。このように、「ものから」の前件と後件が感情、気候の一つの事柄をめぐって対立の二面を叙述することは明らかである。

(15) a　手など拙からず走りがき、聲をかしくて拍子とり、いたましうするものから、下戸ならぬこそをのこはよけれ。　（徒然草 91）

b　あきらかならずおぼめかしてよむ事、これ己達（いたつ）の手柄にて侍るべし。それを

うらやましと思ひて、まなびもえぬものから未練の人のよめるは、何にもつかぬ片腹痛き事にてぞ侍る。　（毎月抄 501）

c　ねぐら争ふ鷺群の数も知らず梢に来ゐるさま、雪の積れるやうに見えて、遠く白きものから、暮れて行くままに静まりゆく声も、心すごく外の故人の心。（関東紀行 115）

（15）は中世になってから派生した逆接関係のものである。意味を確認してみると、（15）a は酒を勧められて、迷惑そうにはなるものの、まったく飲めないわけでもない、（15）b は未熟な人が手法を学び得ていないのに、それを羨ましがってまねているのは苦しいことであり、（15）c は鷺の群が遠く雪の積もるように白くあったが、日が暮れていくに従って、騒がしい声が静寂的になっていくということである。

（14）、（15）をまとめてみると、前件と後件は因果とは関わらない（14）の対比関係に比べて、（15）の逆接関係は前件から予想した結果が後件で実現できないことを表す点は明らかに異なる。このように、因果関係の有無を中心に対比関係と逆接関係を明確に区分すべきである。中世「ものから」の意味用法の分類は表５の通りになる。

表５　中世における「ものから」の意味用法の分類

| 中世 | 無名草子 | 平家物語 | 松浦宮物語 | とりかへばや物語 | 建礼門院右京大夫集 | 東関紀行 | 宇治拾遺物語 | 十訓抄 | 弁内侍日記 | 古今著聞集 | 毎月抄 | 沙石集 | とはずがたり | 信生法師日記 | 徒然草 | 筑波問答 | 連歌集 | 曽我物語 | 太平記 | 増鏡 | 虎明本狂言 | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 矛盾 | — | — | — | 1 | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | 1 |
| 対立 | 3 | — | 4 | 8 | 1 | — | — | — | 1 | — | — | — | 6 | 1 | — | — | 2 | — | — | 6 | — | 32 |
| 並立 | — | — | 1 | 6 | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | 7 |
| 逆接 | — | — | 5 | — | — | 1 | — | — | — | — | 1 | — | 1 | — | 3 | 1 | — | — | — | — | — | 12 |

３．４　近世における「ものから」の意味用法

３．４．１　順接関係の派生

中世では「ものから」の用例数はすでに大幅に減少する。近世では、「ものから」は世話物浄瑠璃や歌舞伎などの口語文からはあまり検出されず、殆ど擬古的な文語文の中で用いられている。意味用法については、順接用法が擬古文の中で現れていることは、山口（1967）が指摘した通りである。一方で、浮世草子や噺本などからの用例は僅かな

がら観察される。

(16) a　天皇崩御給ひては、兄弟相譲りて位に昇り給はず。三とせをわたりても猶果べくもあらぬを、菟道(うぢ)の王深く憂給ひて、『豈(あに)久しく生て天が下を煩しめんや』とて、みづから宝算(よはひ)を断せ給ふものから、罷事なくて兄の皇子御位に即せ給ふ。　(雨月物語 282)

b　母君、「いかにもせよ。稚きものは母が手離れて、一日ひと夜もほかにあらぬものから、泣きわぶらん」と、悲しげにのたまふ。　(春雨物語 503)

c　吉凶は痃癖のごとし。二つながら人の肩にあるものから、吉き事のみも續かず、又凶い事ばかりもないもの。　(好色萬金丹 57)

d　さうじや／＼と書置認め、内で死んでハ後までも、主人に難儀をかくるの道理と、やがて二階の格子をはづし、出やうとなすを、女房ハ盗賊なりとおもふものから、やがて小庭へ立出て、松の小かげに身をよせて、しばし伺ひ居たりしに、　(春色三題噺初編下 263)

「ものから」が順接用法として使われることについて、本居宣長は『玉あられ』の中で接続助詞「から」による影響だと指摘している。その記述を以下に引用する。

今ノ世の人は、いかに心得たるにか、「思ふからといふべき所を、「思ふものからといひ「あらぬ故にといふべき所を、「あらぬ物からといふたぐひいとおほきは、たゞからといふと、同じ意とおもひ誤れるなめり（『玉あられ』p.38）

このように、宣長は「ものから」について平安時代と同様に用いることを主張するのであるが、一方で山口（1967）は、当時「から」という語の言語習慣を身につけた人にとって、宣長の主張の実践は極めて困難なことであったと論じている。さらに、山口氏はどの時代においても通じる擬古という点での問題があるとして、順接用法の「ものから」はしばしば誤用として考えられるが、一概にそのように規定すべきではないと述べている。

なお、「ものから」の順接用法を誤用と見なすべきか否かは決して重要な問題ではなく、実際に使われる用例として存在することも否定できない。なぜ「ものから」に順接用法が現れたのか考えてみると、宣長の説明のように、「から」が中世の末頃から近世にかけて多用されていたために、「ものから」に影響を与えていた可能性を指摘できる。

### 3．4．2　近世の対立・逆接関係

近世に入ると、「ものから」は擬古文の中で順接として用いられることを指摘したが、しかし「ものから」で繋がれる全ての文が順接関係に変わったわけではない。『椿説弓

張月』や『近世説美少年録』の読本の中では、依然として対立・逆接を示すものとして「ものから」が用いられている。

(17) a 「否、然る人は知り候はず、大かたはなきなるべし」といふに阿夏も亦訝りて、「いかでかはさることあらん。こゝの亭主は知らずといふとも、巷に出て人に問はゞ、ぬしの宿所のしれざらんや。疎鹵(おろか)なりき」と肚裏(はらのうら)に、思ふものから推かへして、「身の程軽き武士ならば、人に知られぬ事しもあらめ。……」 (近世説美少年録・巻一 313)

b 両敵共に一対の、美少年とは見ゆるものから、大江杜四郎也勝は、骨法(ひとがら)朱之介に立優り、其面影の花やきて、最美(いとうるは)しきのみならず、威風凛々たるも、凄じからず。 (近世説美少年録・巻三 41)

c いと頼もしくおもふものから、思ふには似ず狗黨に入る、昨の身方けふけ仇、心がらとて身は賤しく、はや山賊となればこそ。 (椿説弓張月下 323)

以上のように、「ものから」の前後事態は因果とは関係なく、内容そのものが対立・矛盾となる。これは「ものから」の従来の用法である。一方で、下記(18)の逆接関係において、「ものから」の後に必ず理由を表す条件節が伴っていることは特徴的である。

(18) a 然れども両箇(ふたり)の媒妁児等は、幸ひに痍深(きず)からず、命に恙(つゝが)なきものから、事私に、治るべきにあらざれば、随即事(すなはち)の顛末(もとすゑ)を、里正に告知(つげし)たせて、領主の庁に訴けり。 (近世説美少年録・巻二 569)

b 先度(せんど)に懲て捷径を求めず、故の畷路(なはてみち)に立かへりて、直急ぎに走るものから、杜四郎の鎌瘡(かまきず)は、彼仙丹を用ひしより、其血立地(たちどころ)に止りて、敢又疼痛を覚えず。 (近世説美少年録・巻三 189)

c 只年の秋毎に、弟子等を相俱して、鎌倉に赴きて、鶴岡の社頭にて、角觝を興行しぬるの外は、させる生活なきものから、親の時購求めし、田圃あれば饑もせず。 (近世説美少年録・巻三 349)

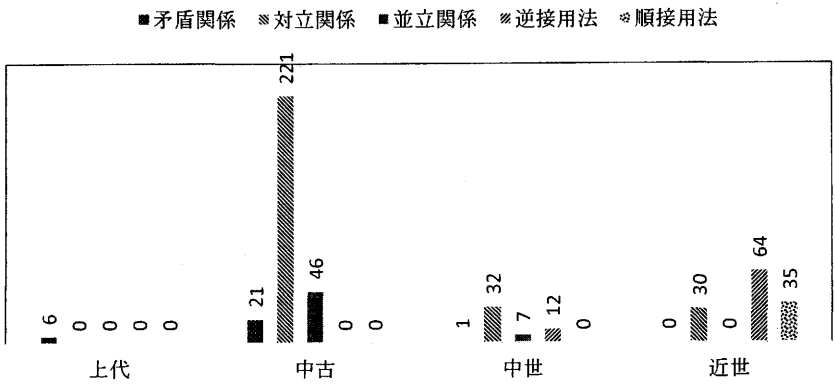
このように、「ものから」が逆節関係を表すときに、前件から順当に予測される事態が、後続の「ば」「より」が表す理由により生起することができなかったという意味合いが読み取れる。以上、近世における「ものから」の意味用法の分布を表6にまとめる。

表6　近世における「ものから」の用例分布[注7]

| 口語文作品 | 福富長者物語 | 仁勢物語 | 好色萬金丹 | 狂哥咄 | 近松世話物浄瑠璃 | 歌学提要 | 源氏物語玉の小櫛 | 東海道中膝栗毛 | 浮世風呂 | 花暦八笑人 | 春色辰巳之園 | 春色三題噺初編 | 小計 | 文語文作品 | 奥のほそ道 | 松尾芭蕉集 | 一茶集・おらが春 | 一茶集・文集 | 雨月物語 | 春雨物語 | 近世俳文集 | 椿説弓張月 | 近世説美少年録 | 小計 | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 対立 | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | 0 | 対立 | — | — | — | — | — | — | — | 2 | 28 | 30 | 30 |
| 逆接 | — | — | — | — | — | — | 1 | — | — | — | — | — | 1 | 逆接 | — | — | — | — | — | — | 3 | 2 | 58 | 63 | 64 |
| 順接 | 1 | 1 | 1 | 1 | — | 2 | — | — | — | 1 | 1 | 2 | 10 | 順接 | 2 | 2 | 3 | 7 | 3 | 2 | 3 | — | 3 | 25 | 35 |

上記の表から分かるように、「ものから」は「ものゆゑ」と同様に文語文に現れる用例数が口語文より多いことが判明した。このように、「ものゆゑ」と「ものから」は次第に文章語的表現となり、現代では口語で用いられなくなった。ここで、上代から近世にかけて「ものから」の意味変化の過程をまとめると、次の図3になる。

図3　上代から近世にかけて「ものから」の意味変遷の流れ




## 4．おわりに

本稿では、上代から近世にかけて「ものゆゑ」と「ものから」の意味変化を考察してきた。従来、両者は構成要素や意味機能が類似しているため、しばしば区別されてこなかったが、考察の結果、二語は全く性質の違うものであることが明らかになった。

「ものゆゑ」と「ものから」はともに上代から逆接の意味で用いられていたが、「も

のゆゑ」の用法は「ゆゑ」の影響を受けて平安時代では順接へと変化した一方、「ものから」は江戸時代に入ってから理由を表す接続助詞「から」の影響で順接が派生したのである。このように、二語の順接用法が現れた時期は違うことが分かる。

「ものゆゑ」は上代において、後件が前件から順当に予測される結果と相反するため、逆接関係が生じる。中古に入って、「ゆゑ」の影響で順接関係に変わったものの、そこで示されるものは、前件では望んでいる事態が実現できないことから後件のような事態になった、もしくはそのような判断を下したという消極的な順接関係である。中世ではこの消極的なニュアンスが弱まり、近世になると一般的な順接関係に転じた。

「ものから」は上代において、後件と前件が示す内容は現実と認識とが矛盾する内容となり、逆接のように見える状況にあった。中古になると、矛盾関係のほか対立関係と並立関係の用例も観察され、「ものから」の機能を対等のものを繋ぐことにあると考えることが出来るようになる。中世になると、矛盾関係が殆どなくなる一方で逆接関係が新たに出現し、近世では「から」の影響で順接関係を表わすようになった。

〔注〕

1．「ものゆゑに」と「ものからに」の形式もあるが、しかし「に」の有無によって語義の変化は見られないため、本稿は「ものゆゑ」と「ものから」の形式で代表させる。

2．橘（1928）では、萬葉集における「ゆゑ」の逆接用法についてすでに記述している。さらに、橘（1929）では、「ものゆゑ」の成立仮説について、「もの」という形式名詞を「ゆゑ」の上に置くことによって、本来「ゆゑ」の直上にあるべき体言が自由な位置を占められるという。

3．小谷（1973）では、「ものゆゑ」の作歌年代について、a、b は最も古い時期に作られたものであるという記述があり、「ものゆゑ」の成立には段階性が見られる仮説に裏付けると考えられる。

4．吉野（1992）では、中古の和歌における「ものゆゑ」は逆接を表し、散文における「ものゆゑ」は順接を表すとしている。本稿も同じように考える。

5．『万葉集評釈』では「珠」は真珠のことで、ここで美しい女を喩えて、「石」はその女を保護している親の譬喩で、真珠は貝の中にあって、水面まで輝くものではないが、名高い伝説によって、大きな真珠はそうした状態を現している」（p. 285）と述べられている。

6．『万葉集私注』の解釈によると、「一嶺ろに」は「一つ山に、一つのもの、夫婦にといふ心持であろう」という（p. 209）。

7．『松尾芭蕉集』には紀行・日記編、俳文編、連句編、『近世俳文集』には山の牛、宝蔵、いまやみ草、独ごとなどの作品について調べた。

〔調査資料〕

《辞書類》『日本国語大辞典（第二版）』小学館・『時代別大辞典　室町編』三省堂・中田祝夫他編『古

語大辞典』小学館・大槻文彦編『大言海』冨山房

《上代・中古》古事記歌謡・日本書紀歌謡・土佐日記・竹取物語・伊勢物語・大和物語・落窪物語・蜻蛉日記・更級日記・紫式部日記・栄花物語・夜の寝覚・狭衣物語・浜松中納言物語・堤中納言物語・讃岐典侍日記・今昔物語集（以上『日本古典文学大系』岩波書店）・万葉集・古今和歌集・源氏物語・枕草子・大鏡・新古今和歌集（以上『日本古典文学全集』小学館）／万葉集　澤瀉久孝『萬葉集注釈』中央公論社・窪田空穂『萬葉集評釈』東京堂出版・土屋文明『萬葉集私注』筑摩書房・続日本紀宣命　北川和秀編『続日本紀宣命　校本・総索引』吉川弘文館・延喜式祝詞　沖森卓也編『東京国立博物館蔵本延喜式祝詞総索引』汲古書院・宇津保物語　室城秀之他編『うつほ物語の総合研究』勉誠出版／索引類：伊勢物語『伊勢物語総索引』明治書院・土佐日記『土佐日記総索引』桜楓社・落窪物語『落窪物語総索引』明治書院・蜻蛉物語『改訂新版かげろふ日記総索引』風間書房・大和物語『大和物語語彙索引』笠間書院・枕草子『枕草子本文及び総索引』和泉書院・源氏物語『源氏物語語彙用例総索引付属語篇』勉誠社・紫式部日記『紫式部日記用語索引』牧野出版・英花物語『栄花物語本文と索引付属語検索篇』武蔵野書・夜の寝覚『夜の寝覚総索引』明治書院・浜松中納言物語『浜松中納言物語総索引』武蔵野書院・堤中納言物語『堤中納言物語総索引』白帝社・更級日記『更級日記総索引』武蔵野書院・狭衣物語『古活字本狭衣物語総索引』笠間書院・讃岐典侍日記『讃岐典侍日記本文と索引』おうふう

《中世》平家物語・徒然草・太平記・義経記・松浦物語・建礼門院右京大夫集・無名草子・毎月抄・関東紀行・筑波問答・増鏡など『日本古典文学大系』（岩波書店）及び『日本古典文学全集』（小学館）所収の諸作品／抄物資料：来田隆『中興禅林風月集抄』清文堂・来田隆『湯山聯句抄本文と総索引』清文堂・馬淵和夫『中華若木詩抄』（巻之上、巻之中、巻之下）笠間書院・國田百合子『長恨歌・琵琶行抄諸本の国語学的研究』桜楓社・坂詰力治『論語抄の国語学的研究』武蔵野書院・来田隆『句双紙抄総索引』清文堂・岡見正雄、大塚光信『抄物資料集成』（別巻索引篇）清文堂・大塚光信『続抄物資料集成』（第十巻解説・索引）清文堂／狂言資料：北原保雄、村上昭子『狂言集総索引』武蔵野書院・池田廣司、北原保雄『大蔵虎明本狂言集の研究（本文篇）』表現社・小林賢次他篇『狂言六義総索引』勉誠出版／キリシタン資料：江口正弘編『天草版平家物語対照本文及び総索引』（索引篇・本文篇）明治書院・江口正弘編『天草版伊曾保物語影印及び全註釈』新典社・大塚光信編『キリシタン版エソポのハブラス私注』臨川書店・大塚光信編『コリャード懺悔録』風間書房・近藤政美『こんてむつすむん地総索引』笠間書院・金田弘編『天草版金句集本文及索引』白帝社・土井忠生他編『邦訳日葡辞書』岩波書店／朝鮮語資料：『隣語大方』京都大学国語学国文学研究室・『捷解新語』（索引・本文）京都大学国文学會

《近世》：仮名草子集・歌舞伎脚本・黄表紙・東海道中膝栗毛・英草集・雨月物語・春雨物語・椿説弓張月など『日本古典文学大系』（岩波書店）及び『日本古典文学全集』（小学館）所収の諸作品／近世文学総索引編纂委員会『近松門左衛門』（全七巻）教育社・近世文学総索引編纂委員会『井原西鶴』（全十巻）勉誠出版・『洒落本大成』（巻一～巻三）中央公論社・『噺本大系』（巻一～巻十九）東京堂出版（国文学研究資料館の大系本文データベース）・小池藤五郎校訂（1941）『花暦八笑人』岩波文庫・岩

淵匡（1998）『醒睡笑静嘉堂文庫蔵索引編』笠間書院・鈴木雅子（2006）『鹿の子餅　本文と総索引』新典社・北原保雄（1973）『きのふはけふの物語　研究及び総索引』笠間書院・本居宣長著『玉あられ、字音仮字用格』勉誠社

〔参考文献〕
橘　純一（1928）「『ゆゑ』の古用について」国語と国文学 5 － 11
橘　純一（1929）「『ものゆゑ』といふ語の意義について（一）（二）」国語と国文学 6 － 11、6 － 12
松尾捨治郎（1936）『国語法論攷』文学社
石垣謙二（1955）「助詞『から』の通時的考察」『助詞の歴史的研究』岩波書店
田口庸一（1959）「『ものゆゑ』の研究」国文学解釈と教材の研究 4 － 9
此島正年（1966）『国語助詞の研究』桜楓社
山口明穂（1967）「接続助詞ものから・ものゆゑ・ものの」国文学解釈と教材の研究 12 － 2
小谷信幸（1973）「『ものゆゑ』と『ものから』という語について」今泉博士古稀記念国語学論叢桜楓社
此島正年（1981）「接続助詞『もの一』の語群」湘南文学 15
山内洋一郎（1981）「接続助詞『ものから』『ものの』について」奈良教育大学国文・研究と教育 5
吉野政治（1992）「散文のモノユヱ（二）と和歌のモノユヱ（二）」同志社女子大学学術年報 43 － 4
吉野政治（1993）「逆接用法モノユヱ（二）成立私案」同志社女子大学学術研究年報 44 － 4
啓蒲浩二郎（1993）「古代接続助詞における逆接の構造―もの系の語を中心に―」奈良教育大学国文教育と研究 16
小杉商一（1994）「『ものゆゑ』逆接のこと」東京外国語大学論集 48
竹部歩美（2008）「逆接のモノユヱについて」人文学報 398

（ま　しょうか　大学院人文社会系研究科　博士課程 1 年）